

野村傳四

散歩した事

散歩した事

明治三十八九年頃の先生、即ち千駄木時代の先生は、よく散歩をされた様である。食前食後の散歩も多かつた。而してそんな時の散歩は、中川芳太郎氏の放送によれば、定まって、千駄木から本郷三丁目の十字路に出^いで、そこから東に曲って湯島天神脇の切り通しを下り、池の端に出で、そこから根津権現様の社内を抜けて帰宅されたと云う事で有る。私にはこの種の散歩に御供をした明瞭な記憶を持ち合せぬが、先生は又別に三四時間に互る様な

散歩も往々なすった。之は人が誘い出すのか、御自分が主唱者か判然せぬが、兎に角よく散歩された。無論一人の時もあつたらうが、一二の人々との散歩も多かつた様に記憶する。

私一人が御供した場合を拾って見ると、貸家を探すと云う触れ出しで、麻布、芝の辺を歩いた事がある。電車は恐らく本郷三丁目で乗って、芝区桜田本郷町辺りで降りたであろうが、それから山之手方面を二人で歩いて、別に貸家を探すでもなく、巨大な屋敷などがあると無暗と感心して歩いたのだ。阿波の蜂須賀侯の屋敷前では、

門構えの堂々たるのに見惚れて、先生は態々砂利を踏んで内側迄はいり込み、折柄寒い日だったが、外套の襟を立てた儘、内から外の方に向き帰って、門の家根造りを暫らく仰ぎ見て、出ようともされぬので、私は道路に立った儘、御待ちしつつ、今にも門番に一喝されはせぬかと心配した事を今でも記憶して居る。而して目的の貸家は途に見当らなかつた。

初秋の頃、一度田端附近を共に散歩した事がある。無論乗り物なしで、千駄木から鷗外漁史の千駄山房の前を通り、団子坂を下り、美術院同人の「新しき村」とも云

う可き、例の藁葺家数軒立並んだ脇の幅一間の道を辿つて道灌山に出た。すると俄かに夕立模様となつたので、二人はそこの鳥居脇の一軒茶屋に暫らく雨宿りして、岸下の田端駅から直ちに一面の田となつて居る武蔵野一帯の景観が、夕立雲の下に豪雨となり、好晴に返るのを無言で見とれた事があつたが、帰路をどう取つたか全然夢である。

或時は、千駄木から上野迄歩いて、そこから電車で浅草迄ゆき、ここの第六区と云う妙な所を通り抜け、公園内のそば屋で腹をこさえて、そこから又向島一帯の広い

通りや、狭い道をあてもなく歩いた。何でも東は田になつて居る道路を南行したと信ずるが、今のどの辺になるものやら。又当時の向島は土手を一步中に入れば多くは住宅つづきで、板囲いよりは植込みのまがきが多数であつたから、中の模様も垣間見る事が出来た。私は途中、先生に「悟り」と云う事を御尋ねしたら、先生は言下に「彼も人なり我も人なりと云う事さ」と教わつた事を明かに記憶して居る。

私一人が御伴して散歩なすつた記憶は以上の三回が最も印象に残つて居るが、別の御連れが加わつた場合もあ

る。羽織を着る頃で、或は初春の候ではなかつたかと思
うが、ある日の午後千駄木を訪問したら、一人見慣れぬ
御客様があつた。紹介された所では、広島高等師範学校
の教授で、小林郁と云い、社会学の学徒であつた。小林
さんは既に先生とも旧知の間柄で、話は至極打とけて、
佳境に入つて居た。何でもアメリカに留学するお別れに
訪問されたとか。すると誰が云い出した事か、深川に散
歩しようと言ふ事となり、無論私も参加した。(私が深
川の地に足を踏み入れたのは、後にも先にも此の時丈で
あるから。) 私はこの散歩を今でも大に感謝して居る。

深川と云うと途中は電車である。本郷三丁目から乗って、一二度乗り換えて、永代橋を渡り、八幡様の前が終点だったから、そこで降り、それから奥の方に歩いたが、同行者は、今の小林さんに先生と私、外に一兩人あつたらしく思われるが、誰であつたか思い出されぬ。道を行くと奥に行くに従つて、町は段々さびしく汚なくなり、十町も行つたら田となつて仕舞つた。すると程遠からぬ所に、疎林があつて、神社がのぞかれた。一行はそこに辿り着いて一拝した。元八幡宮であるとする事であつた。ここに一憩して、道を南にとり、やがて海の見える所に

来た。此処から何処に行こうかと云う事になったが、東は田で、この方へ行けば帰路は遠くなるのだが、時は早や四時過ぎであつたから実行不可能となつた。元の道を帰るのはいやだ。所が西の方はずっと竹の垣が結い回して、中は広々とした一区域になつて、吾々は之を養魚場と見た。而してこの養魚場の中に置いて四五町向うに洲崎の遊廓が居然として聳えて居た。そこで一同は養魚場を抜けて、遊廓の中を通つて帰ろうと云う事になり、誰が先頭だつたか知らないが、丁度近くにあつた小門を開けて中に這入り込み、物の十間も行ったかと思ふ頃、後

から番人が声をかけて、外に出ると云つて怒声を発した。すると「いや戸が開いたから通つても宜いと思つて、つい……」と誰かが弁解して番人の前を通り抜けると、先生も中にまぎれて、ウフフウフフと笑つて居られた。番人は一同を門外に追い出すと、大きな声で「貴君方の様な教育のある御方が……」と怒鳴つた。而して吾々はその竹垣に添うて細徑を伝いつつ北行し、道々「あなた方の様な教育のある御方が……」を口々に繰り返し、笑ひさざめて、町の方に出て、終点迄来て、薄暮電車に乗つて歸つたのであつた。

扱て最後は、寺田さんの日記の中にも記載され、「寺田寅彦全集」が完成したら、この日記も掲載されて、やがては古典的事実となる事だし、又事が寺田さんと先生に関する事であるが、私は寺田さんが「蒸発皿」に於て「夏目漱石の追憶」を一読した時、直ちに寺田さんに手紙を以て、「あの時の事が抜けて居るのは惜しい」と云ってやったら、直ちに返書が来て「なる程忘れて居た。

今度『追憶遺補』とでも命名して発表しましょう」と云う事だったのに、それを果さずに長逝ながしされたのであるが、若し寺田さんに書いて頂いたらおんがひ嘸かし、面白かろうと思

うけれどもそれも致し方がないから、私が以下大略を紹介する。

「漱石全集月報」第十二号中、矢島氏の筆になる、「寅彦の日記に現われた漱石」中に、寺田さんは明治三十八年八月二十七日の条に、

「夏目先生を訪う。野村君約により来る。鈴木亭の落語へ先生を誘う。先生は午後晩翠等と快楽園にて集会の約ある由なれど強て誘うて行く。落語は満員客止なり。浅草公園に行く。日曜にて久々にて晴たれば人多し。電車にて有楽軒へ晚餐に行く。」

と認めてあると云う。

私はこれ迄何十度、この日の事を回想したか知れぬ。二人は日本の文壇に不滅の功績を残した天才、而して之に配さるる私は全く無才の一寒人で、よくも二人が私を仲間に入れて下さったものと厚く感謝をする。それと共に以後三十年間その日の判然しないのがもどかしかった。私の記憶では、千駄木の御宅の縁側で、昼下りの日光を浴びつつ先生を誘ったと覚えて居るから、九月或は十月の候らしくもあり、又三人が帰る折にひどい夕立がしたから、十月でもなさそうだし、そこで私は仮に九月

の末頃と定めて居たのであるが、今寺田さんの日記に、八月二十七日とあれば文句はない。私はこの八月二十七日と教わった時、喪われたる家宝の行方がわかった悦びはこんなかと思う程嬉しかった。

扨て其の前日則ち八月二十六日位に、私は寺田さんと、大学の中か本郷の通りで会ったと見える。而して二人は明日先生を誘って鈴木亭に落語聞きに行こうと約束したと云う。そこでその落語であるが、その頃の東都落語界の状勢を申すと、普通の寄席で他の芸と一所に聞くのは、時間に制限されて、充分に味わう事が出来ぬ。それ

では落語家諸君も力抜けがして、自然自棄になるだろうと云うので、斯界の同情者の肝煎りで、落語ばかりで他を交えない落語研究会と云うのが出来たのであり、その第一回は蔵前の何とかと云う寄席で催された。而して私は其会に先生に誘われて行った。之が私が落語を耳にした最初で、私はこの席で始めて、圓左、圓右、圓蔵、小圓朝、馬楽、小さんと云う面々の至芸を楽んだものだ。其後この研究会は日本橋南を東に入った榛原の隣りや、下谷広小路辺りの鈴木亭其他で、月一回場所を代えて興行し、入りは大抵何時も一杯、中に入ると御客には幸堂

得知さんだと聞いたが、長髯を撫しつつ端座して居たものだ。そんな次第で客筋は皆上等であった。而して私は殆ど毎回欠かさず聞きに行つたし、先生宅出入の諸君も頗る熱があつて、故坂本四方太氏の如きは落語の台本迄一二書いた様に記憶する。而して寺田さんも矢張りその派の人であつたと見えて、今の約束が出来たのである。所で二十七日の当日であるが、日記によれば私は寺田さんより後れて先生宅に着いたと見える。他の相客はない。而して二人は一旦は座敷に上つたかどうか明瞭な記憶がないが、三人共に縁側で照りつける午後の日光を浴びつ

つ盛んに鈴本亭行を勧めたのだ。実際盛に勧めたが、先生は最初の程は中々応諾がなかった。理由は土井晚翠氏が留学から帰って今仙台から上京して居るから、その歓迎会に出席しなければならぬと云うので、いくら勧めても頑としてお聞き入れがない。私はその時晚翠の名はよく承知して居た。日清戦争後、一般の文芸復興と共に新体詩が勃興し、作者も輩出した中で、藤村、晚翠の二人は殊に喧伝されて、藤村が叙情的女性的なのに対して、晚翠は瞑想的男性的であり、殊に晚翠の「星落秋風五丈原」と云う長詩は、明治三十三年頃の発表と思うが、当

時の文学青年は、その一節位は暗記して居たのである。併しその後晩翠の名声は稍^{やや}下火になり、それから下火の儘に留学したのである。而して先生の書簡集を見れば、明治三十四年八月十七日、奥様向け「八月十五日土井氏パリスより来倫当分小生方に止宿の事に致候云々」とあり、翌年三月十八日、奥様向け「……土井とも近頃は滅多に遇わない……」と見えて居るから、滞英中の交誼上から云つても、先生は歓迎会に出ると決心された事だろうが、一方そんな事を知らぬ二人は、当時の晩翠氏を詩囊既に竭^つきて一介の英語教師になり降つた人と、幾分侮

蔑したもののか、「晩翠何するものぞ。先生行きましよう」と云う調子で、執拗に先生を誘って仕方なしに二人と共に出かける事になされた。今にして思えば先生と晩翠氏に相済まない事であつた。

そこで三人は千駄木を後にして出た。無論上野迄歩いたのである。而して鈴木亭に行つて見ると、寺田さんの日記では満員であつたそうだが、私には今その辺の記憶がない。そこで今度は浅草に行こうと云う事になった。漱石と浅草、之はいかにも似合わしからぬ組合せの様であるが、先生は左程浅草を嫌つては居なかつた。既に本

文中にも先生と浅草を通過した事を述べたが、当時公園の第六区と云えば矢場が並んで魔性の者が昼でも出そうな場所であつたが、そんな所も平気で通つて毛嫌いもされなかつた。それからずっと後年寺田さんの帰朝歓迎会があつた時も、一同は先ず浅草に行き、それから両国の鳥屋に上つた。而して浅草では先生は皆と共に木馬にも乗つて嬉々として居られた。そんな先生だから上野から浅草にと即決可決となつたのと思う。寺田さんに依ればその日の浅草は久方振りの好晴と日曜とで人出が多かつたそうだ。私はそんな事は記憶せぬ。只三人は観音堂の

前に聳える五重塔の下に立って塔を見上げた事や、大銀杏の下蔭をぶらついた様な事が思い出せるばかりだ。そこで考えて見ると、吾々は何も好んで大銀杏の下など徘徊したのでなくて、余りの人出に辟易したのであったろう。つまり折角来たは来たが何等所期の目的を達しなかった次第である。だからこれで帰ってはつまらぬのであった。

そこで之から何処に行こうと三人は考えたのである。其の結果再度電車に乗って、新橋駅有楽軒のお玉さんを見に行く事となった。で読者は現在の東京停車場あたり

は、まだ一面馬ごやしの広っぱで、新橋の貨客の吞吐口であつた明治時代を想起されたい。駅前は一寸した広場になつて、その西側に十数軒の商店が並んで居る中に、木造二階建の洋館があつた。これが今申す有楽軒と云う洋食屋である。話が脇道に外れるが、その三四年前からハイカラという詞が新に出来て大流行であつた。之は当時の新帰朝者が欧米の流行であつた洋服のカラーの高いのをつけて、首も廻らぬと云う様に見えたから、この種高襟の徒を侮蔑的にハイカラと云つたものだが、可笑しい事に先生も帰朝の際は矢張りその徒の一人であつた。

それは「漱石の思ひ出」の一〇二ページ、奥様が先生を出迎えにいらした時御覧になった先生を叙して、

見たところ洋行前と別に変った様子もなく、ただおろしく高いダブル・カラーをしてきちんと身についた洋服を着ているのが物珍らしいようでした。

とあるので分る。つまり乙に済ました高襟の帰朝者。氣取った洋服紳士がハイカラであつた。而して其の代表的人物として、当時三歳の児童も承知して居た位なのは、望月小太郎、松本君平両氏であつた。それから現今でもまだハイカラだと思わせるのは、失礼かも知らぬが、田

川大吉郎氏の放送句調である。

扱てこの望月氏の可愛がって居る女が、新橋の有楽軒に居て、名をお玉さんと云うという意味の素破抜きが、たしか萬朝報かに出て、その後間もない事だから、そのお玉さんを見に行こうと誰か云い出し、之も即決可決になった。而して電車に乗ったが、道筋は雷門から蔵前両国を経、本町通りを奔つて、三越の前あたりに出て、それから銀座を南に行った。而して目ざす有楽軒の二階にツカツカと上って行った。室は二つか三つかある位の小じんまりしたもので三人はその一室に席をとり、型の如

く洋食を注文した。出て来た給仕女は二十七八、別に着飾って居ず、普通の服装をして居たが、顔だちは整って居て、否味がなくて好感の持てる方であつた。又店には他に給仕女が左様ありそうな構えでもないから三人は之がお玉さんだと思つて居た。すると女が皿を持って来た時、先生だか、寺田さんだか「君お玉さんかい」と尋ねたものだ。「違います」と微笑しつつ答えて女は去つた。暫くして皿を持って来た。今度はまた二人の中、何れかが「君がお玉さんだろう」ときくと、今度も又「違います」と答えるのみで出て行つた。事務的以外に尋ねた事

はこれ位で、まず目的を達したと云う次第。そこで払いであるが、私は当時まだ書生であつたから、全然両先輩に依存した訳だが、何れか一人の懐中から支払を済ますと、そこを出て帰りと云う事になつた。外は既に薄暮となつて居た。電車は外濠線に乗つたが、当時は市内に旧馬鉄系、街鉄系、外濠系の三電鉄のあつた時代と思ふから、外濠線に乗ればお茶の水で降りてそれから先は歩くと云う訳だつたかと思う。で、電車に乗って呉服橋附近迄来ると豪雨となり、雷鳴頻りに至つて、遂に停車して仕舞い、車内の電燈も消えて全く暗黒になつた。三人は

余り乗合もない車内に立往生してその間三十分もあつた
と思う。その間どんな話が出たか、全く記憶がない。恐
らくお玉さんの蒸し返しでもやったのだろう。

それから電気がついて、車が動き出して程なくお茶の
水で降りて、而して少くとも二十分間は三人が道を伴に
した訳であるが、この有楽軒行きは、偉大なる両先輩の
ステツキボーをつとめた私として、三十数年後の今日感
懐^{いよいよ}愈^{いよいよ}深きものがある。時に先生の御年は三十九、寺田
さんは確か二十八であつた。

日本文学電子図書館

散歩した事

著 者：野村傳四

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館